

往復書簡

宇野千代
中里恒子

文藝春秋版

往復書簡〈宇野千代・中里恒子〉 奥附

昭和五十一年三月二十五日 第一刷

著 者 宇野千代・中里恒子

装幀者 青山二郎

發行者 檜原雅春

發行所 株式會社文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三番地 郵便番號一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二一一

印刷 精興社 製本 和田製本 製函 加藤製函

萬一落丁・亂丁の場合はお取替へいたします

往復書簡

〈宇野千代・中里恒子〉
—1974. 12. 9 ~ 1975. 10. 20—

その一（十二月九日—十二月卅一日）

宇野千代さま

十二月九日

あなたの岩國のお宅の庭造りのことを拜見して、これは楽しいだらうと想像してをります。何故つて、それは自然観照のなかで、まあ身邊に、自分の自然を造りだすおもしろさでせう……枯山水なんていふのは、水を使はず、水をおもはせる方法でせう、だから、庭造りは、結果としては、小説作りみたいなものね。

自己を語らないで、自己を語る、などと坊さんじみるけれど、さうなればねえ。

「ふるさとへまはる六部の氣の弱り」、これはあなたの隨筆の中にありました。私は、あな

たを、ずっと氣を強くもちつづけた人とみてをりました。今も、みてゐます。それでも、こんな句に、ひよいと、あなたので、れ方が出、そして、そんなことを言はれたのが腹立たしい、といふ氣持が、やつぱり氣のつよいひとの、氣の弱い部分かな、と思つたりしました……弱さをみせないといふことは、しよせん作りものなので、むしろ私は、弱さを守つてゆくには、よほど氣がつよくないとだめだと思つてゐるのです。

仕事の鬼といふことをよくききますが、仕事は私……とても神のやうにとまではゆかなくとも、鬼の心を脱したところではじまる、無心無慾ではじまる、さうぢやあないでせうか、はじめから終りまで、ぎゆうぎゆうと度ぎついののは、單にさういふ性質なのでせう、文學のつよさは別のことですね。

六部の氣の弱り、鬼の眼にも涙、それがみえてこそ小説はおもしろいと思ふのです。むやみと思想などを振りかざさずに、描寫のなかにさういふものが出ればねえ。

そんなことをこの頃、なにかの折に、よく感じます。ですからあなたの、ふるさとへむかふお氣持を、もつと伺ひたいと思つてをります。

中里恒子拜

十二月十二日

中里さん。お手紙繰返し拜讀いたしました。あなたには、凡てお見通しなのです。あなたの仰言る通り、私は自分の弱いところを衝かれたので、それで腹を立てたのかも知れませんが。弱さを守る心境と言ふのは、あなた獨特の表現ですね。参りました。

参つた序でに、あなたの新年號の小説、三作とも拜讀いたしました。「山姫」に一番お氣持が乗つてゐると聞きましたが、流石ですね。これはこれである、とはつきりとはどこにも書いてないのに、しかし、あの「新女」の姿は、まるでこの眼で見るやうに、生き生きと浮び上つて來るのです。これが、眞の描寫と言ふものだな、と私は思ひました。かう言ふものこそ、古典に通じるものではないかと、改めて思ひました。

あなたはどこでどうして、この表現方法を手にお入れになつたのでせうか。たぶん、「あたし、昔からちつとも變つてないわ。」と仰言るに違ひありません。しかし、私の眼には、あなたは一昨年、いや、その前の年くらゐから、突然變異が起つたやうに見えます。その前の頃のあなたの小説は優しかつた。それが、鬼女におなりになつたやうに、空恐しいほど深遠なものをお書きになるやうになつたのではないでせうか。

小説と言ふものは、いま覺えたばかりの方法などによつて書くものではなく、性格によつて書くものだと言ふことくらゐ、私も知つてゐます。たぶん、あなたは、あなたの性格によつて、一途に變ることなく、仕事を續けておいでになつたに違ひないのですが、私にはその上に、神や佛の力ではなく、突然に、鬼女の力が加はつたやうな氣がします。あなたのお嫌ひな言葉をわざと使ひましたが、お許し下さい。

「初音」「浮繪」ともに、「山姫」に劣らず感動いたしました。しかし、どうしても悪口を言ひたくなるのは、あなたの小説の題のつけ方です。ことに、今度の三作は、どれも、じれつたい題だと思ひます。小説そのままの題ではいけないのでせうか。あなたに、一ひねりする趣味があるとは、意外なことです。 さよなら

千代

お手紙ありがたく拜見いたしました。一字一字丹念な字を拜見して、日頃、原稿も下書をして、それからよく吟味して清書なさるといふあなたの書き方、それは考へ方でもあると思ひました。無駄をとるといふこと、正身でものを言ふといふことだらうと思ふのです。

この正身の仕事、小説がこの頃すくないのではないでせうか。無駄が無駄であるうちはおもしろくない、おしやべりにすぎないのではないでせうか。私は、元もと無駄が好き人間ですが、べたべたと小鳥の囀りのやうに、脈絡もなく長ながしい物語は、へいこうです。わりに多いのね近頃、ロングスカートが流行るやうにひきずつて。

「海」一月號、「いりみだれた散歩」武田泰淳、おもしろく讀みました、ロングスカートだけれど、中味がつまつてゐて、次々と眼の動き方に特徴があり、人間性があつて、たしかにいりみだれたままに書いてあります。下手に書いて手のつけやうがなく、いりみだれたのは違ふからおもしろい、これは哲學かもしれませぬ。

この寒さに、寒氣の本場、松本へ行つてきました、山は雪だし、風は手を切るやう、なんにもないところでした。お城はあるけれど、町はみんな現代化して……一軒のがらくた屋にゆきました。全く足の踏場もないがらくたばかりの山で、明治頃の松本押繪が、二、三點あ

り、田舎芝居の錦繪みたいな女型を一枚買ひ、染付の皿が眼につき、値段をきくと四千圓也、山きずらしき所に、紙など貼つてあるので、負けるやうに言つたら、主が、これは買ったばかりのもので、私も氣に入つてゐるし、仰言る通りきずもあるから、およしになつた方がいいと言ふのよ。そのお皿は、言はば正身のもので、あとは、がたがたとよごれものばかりでしたが、この、よごれもの、まがひものが、ぼんぼん若者たちに賣れるさうです。近頃の若い人は、お金を一番持つてゐるさうです。ものは、好き好きね。

山の驛で賣つてゐる、なんとか鍋辨當といふのが、ぞつとするほど冷たく、かりにも、鍋と言ふのに、こつこつの御飯で、久しぶりに食べた驛辨の不親切に驚きました。なにごともその場だけ、あとは、つめたからうが、どうならうが、知らないといふわけ。手をかけることを惜しんだら、おしまひですな。

そんなこと言つても、私の書齋など、手をかけない典型的なもので、掘炬燵のまはり、ストーヴのまはりは、無残に散らかつてます、片づけても、また必要なだけ散亂するので、凡てそのままにして、私は牢屋にゐる氣です。時々、犬や小鳥や花のそばへ行き、人がみえると牢屋を出るといふ式で、殆ど、家の中だけをうろうろしてゐます。

度々、あなたとの座談對談を望まれましたが、あなたが、話は出来ない、駄目だけれど、手紙なら書く、手紙はわたしは自信があるといふことで、往復書簡を、實際に郵便でやりとりといふわけですが……これが、戀文とでもいふのなら、待つてた、來た、すぐ返事、また

書くといふ風に、とめられてもお互ひにじつとしてはゐられないことでせうのに、やつぱり戀文のやうには、早急にゆきませんが、手紙を書く相手が存在するといふことは、これはたしいしたことです。

私は外國にゐる娘にもめつたに手紙を書きません、それでゐて、向うがよこさないと憤慨して、わざわざ、婿に何年ぶりかで不確かな英文の手紙を書き、どうやら通じたとみえて、婿から英語の返事がきました、娘は、その間知らん顔をしてゐます。私たちは、切せつと手紙を書きあふやうな母子ではありませんが……書いたことよりも、書かないことでわかつてゐるやうな、へんなことでございます。

恒子

中里さん。

十二月十九日

お手紙ありがとうございました。手紙は自信がある、と言つたりした癖に、案外さうでもないのを發見して、これも私の老齡のせるかと思ひます。若い頃は、手紙を貰ふのも嬉しかつたが、書くのもとても愉しかつたのです。手紙だけではなく、この頃は、いろいろものぐさになりました。あなたはよく旅にお出掛けになるやうですが、私はそれもしません。田舎の家へ行くほかは、どこへ行つて見たいとも思ひません。さうさう、一二ヶ月前まで、エジプトへ行くと言つて大騒ぎしてゐたのですが、あの邊が物騒になつて、旅行社から企劃の中止を知らされてから、まるで憑物がおちたやうに、エジプトのエの字も言はなくなりました。好奇心も持續しないのかと思ふとをかしくなります。

この往復書簡で、作品の批評もして見たい、と言ふことでしたが、あれはやめにしたいと思ひます。素晴らしいと思つたもの、好きだと思つたものだけについて、書くことにしたいと思ひます。駄目だと思つたもの、嫌ひだと思つたものについて、何か書いて、誰が得をするでせうか。實は、私は毎月の雑誌の小説は、大體、讀むのが習慣です。一種の閑つぶしなのですが、傑作だと思ふものにも、しばしば出會ひます。「宇野さんは、感激する癖があるからなア、」と、いつか井伏さんに笑はれましたが、その替り、詰らないものを讀んだときは、これは内緒の話ですが、「へつ、」と聲に出して言つて、その作品を馬鹿にします。しかし、その作品を人の見てゐる前で、公然とけなしたりは決してしないのが習慣です。

六十年も昔のことですが、私は田舎で小學校の教員をしてゐたことがあります。尋常二年

の男女混成の組を受け持ったのですが、その組は乙組と言つて、出来の悪い子供ばかりを集めたものでした。「まア、お前は、こんなによく出来るぢやないか、」などと言つて、私は一人の子供をおだてます。昔は子供のことを、平氣でお前などと言つたものです。をかしたことに、おだてられた子供は、實際にも、よく出来るやうになりました。一年経つて、學期末が来たとき、この乙組の子供たちは、殆んど甲組の子供たちと大差がないやうになつて、或種の出来ごととして、私は郡の視學からほめられたと言ふ記憶があるのです。

「へつ、」と言つて馬鹿にした作品が、おだてたくらゐで傑作になる譯はないのですが、しかし、私はよく嘘をつく人に、「あなたは嘘をつかないから好きだ。」と言つてのけた經驗があります。人の氣持も、また才能も、どうして生れ出るのか、はかり知られないことです。

お正月にはどこかへいらつしやいますか。私は一月の半ば頃に、また田舎へ行きます。あなたが松本でごらんになつたやうな古道具屋が、田舎にも二軒あります。どちらも骨董屋とは言へない店ですが、町へ着くといきなり、自分の家へも着かない前に、私はこれらの店へ廻ります。しかし、この頃は金廻りが悪くて、ちよつとしたものを買ふのにも、月賦と言ふことにして貰ふのですが、この間は蒔繪の菓子器を見つけました。小さな、お椀くらゐの大きさのもので、廻廊に一人の殿上人が仰向いて月を見てゐるのですが、その顔つきの、ちよつとエロチックな感じが、面白くて買ふ氣になりました。好きか嫌ひかだけの標準で買ふのですから、出鱈目です。

まだ、返子のお宅へも伺はないのに、私はあなたを田舎の家へおつれしたいと思つてゐるのですけど、夢ですね。

千代

(片眼はホータイ、片眼もはれて亂雑な字で御めん下さい)

宇野千代さま

十二月二十一日

私はきのふ、返子の町へ使ひに出て、往來でころんで、顔を打つて血だらけになり、救急車で外科へはこばれ、鼻りやうから眼の下にかけて、三針か四針縫ひました。その他もかすり傷だらけで、自分乍ら驚きあわてました。往來で、ひよろひよろした年寄が歩いてゐて、車が來たので、あぶないと思つて支へてあげようと小走りになつたところ、往來のコンクリのへこみに氣づかず、あつといふ間に沁り、大變だと思つたときは、前のめりに、顔からコンクリにぶつけたわけです。

人の心配をするより、自分の足元に氣をつけるべき年になつてゐたのですね。十日もすれば、傷もなんとかなるさうですから心配はないと思ひます。レントゲンでしらべた結果も大丈夫のやうです。

以後、人のことより自分の足元に氣をつける、といふ警告と思つて氣をつけませう。

さて、作品のこと、ほんとに仰せの通り私なども、好きとか、きらひとかの判断ですから、人の作品をあげつらふのも意味のないことで、きらひなものは、讀まないことで済んでしまひますからね。

私はこれから、少し長いものにかかる豫定ですが、うまくゆきますかどうか……

旅は、一年間、毎月出かけることになつてゐるので、これも行動的なものなので、家にこもりがちの私には、半分たのしみであり、半分は面倒でもあり、……けれども氣のりがしてゐますから。

道具類も、近頃たかくなりました。私も好きなので、いいものを見ると、手を出したくなりますが、持つてゐるものを使ひきることを考へるやうになりました。私はコレクターではなし、その趣味もなし、日常座臥、だいたい氣に入つたものを身邊におくことで満足してゐます。

この秋、辻ヶ花の着物を作り、近いうちに出來てくる筈、幾つになつても女は着物に關心があり、見てくれる人がゐるわけでなし、是が非でも、着てゆきたいところがあるでなし、